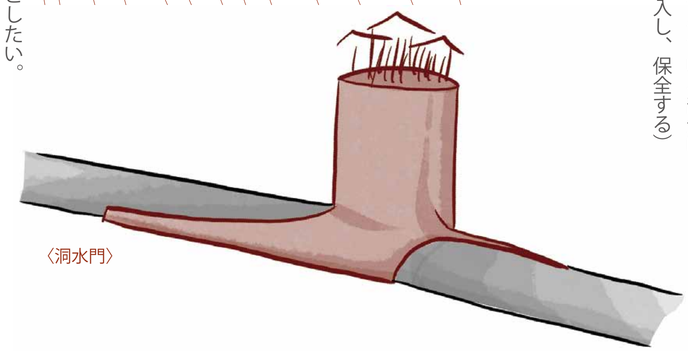
歴史的土木建造物の利活用方法　-Civil Engineering of Design-

紀伊国は江戸から近代まで、地方でありながら地元で栄えた商人や企業らが自主的に地元の開発に注力していた歴史が多々ある。
新宮鉄道もそうした地元の人たちの想いが詰まった近代遺産のひとつであり、
木材を運ぶため地元財界が出資し、観光振興など紀南地域の発展にも貢献した。
しかし現在では地元財界の力が停滞する中で、地方の力も衰えてきている。
当時の地方商人らの力を間近に感じられるこの隧道は、残す価値のあるものである。

（土木：隧道の姿をそのまま残す。
レンガ壁が剝がれてきている部分は
発泡ウレタンを注入し、保全する）

（土木：隧道の修繕方法のひとつである
水抜きボーリング工の技術を使い、
湿気による建築の劣化を防ぐ）

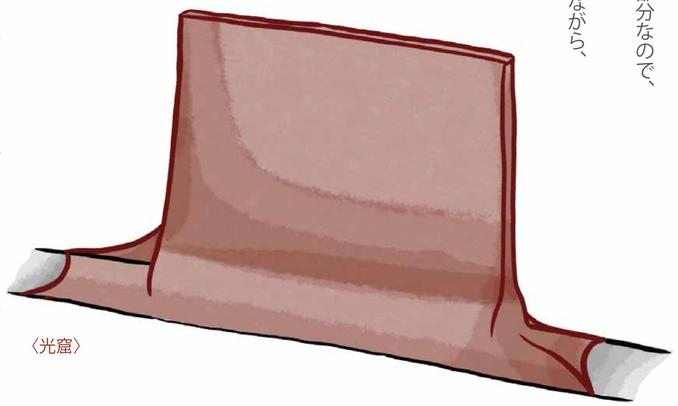

〈洞水門〉

（土木：隧道から湧き出てくる
湧き水を、トンネル中央に
集水することで、保全に
つながる）

忘れ去られていく建築とその記憶を、
隧道を利活用することによって呼び起こしたい。
心の内にある記憶を、
場所とその地にある建築の力を借りて懐古させると共に、
新たな世代に向けて歴史や記憶の継承の起点となる地にする。

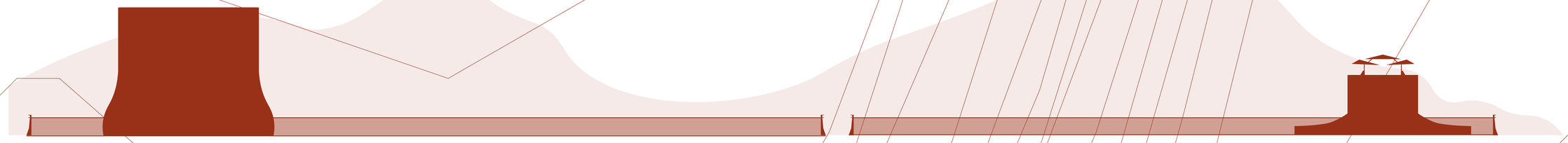
現代社会では大量生産消費を是正するような選択肢がたくさんあるが、
そうした社会を批判すると共に、
これからの建築を再考するきっかけになればと考える。

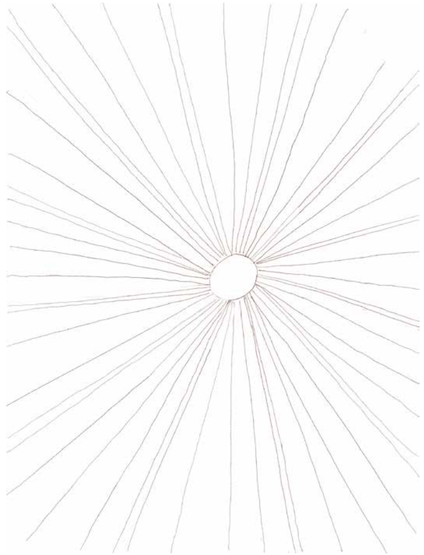
（土木：構造的にも修繕し難い部分なので、
その現状を残し、
隧道からそれた遊歩道を歩きながら、
隧道付近を巡り歩く）


〈光窟〉

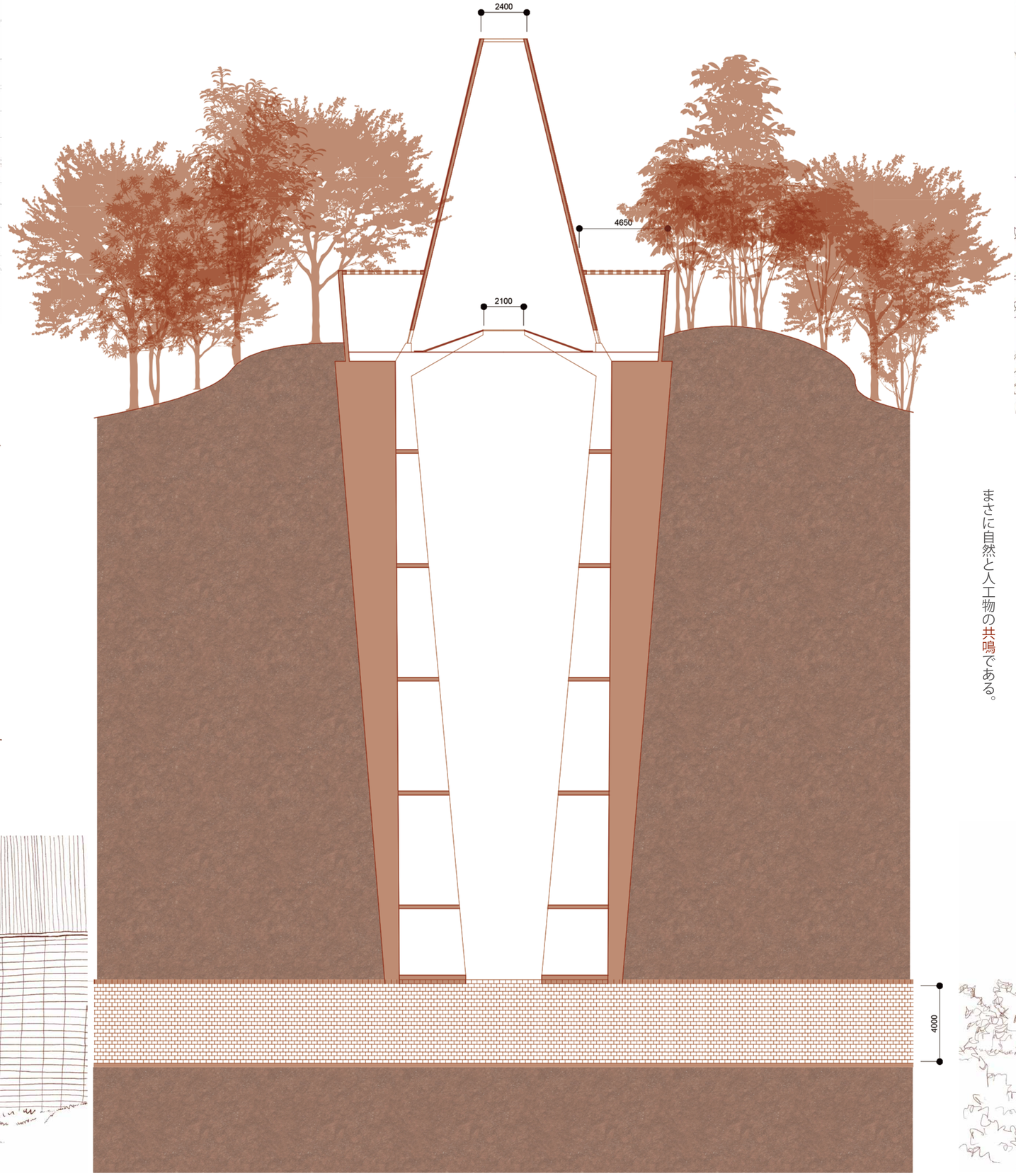
日常を顧みる―自然を纏った建築　-Future-

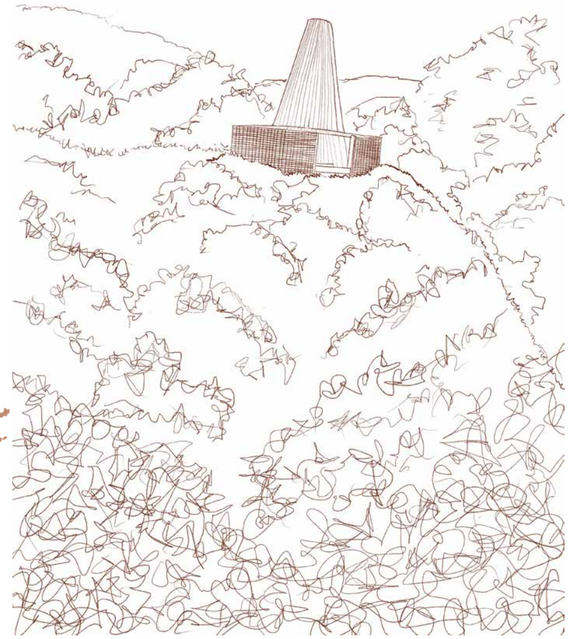
自然と建築との関係性を考えながら、
今の私たちにできることや今の建築にできることは何なのか。
時間の流れは深いもので、長い隧道を、時間をかけて歩くことで感じることはたくさんある。
この敷地で感じたことをまた日常生活に戻り、振り返って思い直す。
そして、こうした近代土木建築の利活用方法を全国的に広げ、
建築を通して日常生活を見直すことのできる場所が増えていってほしい。











⑥ 余韻 -epilogue-

長いプロムナードを歩き、最終地点へ。
これまで歩いてきたプロムナードをふり返る地点である。

地元民が力を合わせて開通させた鉄道、隧道の背景、
またそれに覆いかぶさるように生える植物の光景。

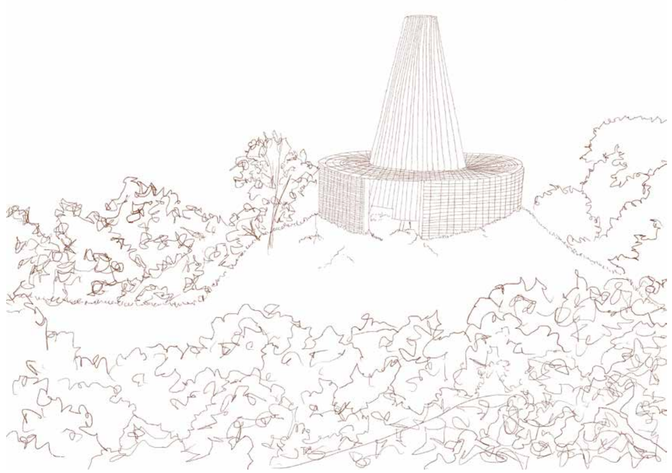
熊野杉材の床に寝ころび、視覚を閉ざし、
音で感じる空間である。

人気のない静けさの中に聞こえる自然界の音が、
よく聞こえてくる。

その外部の音を長い筒の建築に取り込み、
反響させる。

まさに自然と人工物の共鳴である。





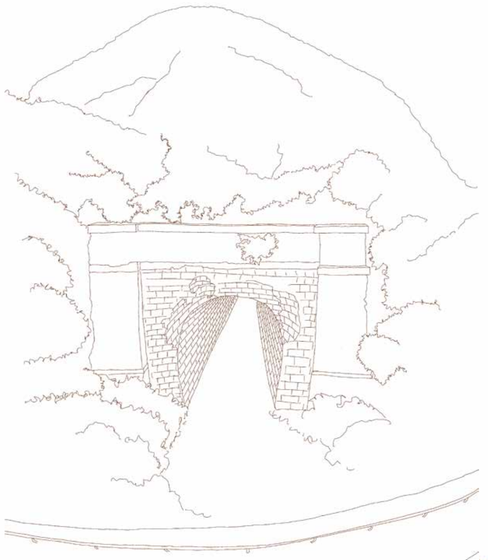
稲荷山隧道の出口付近は最も崩壊の激しい隧道であった。
そのため崩落していた部分の半分は新たな構造物を提案し、
残りの半分は行き止まりにし、
迂回させる動線計画を施した。

動線の先端部まで行くと、
山のように積まれた瓦礫が
人々の足を止める。

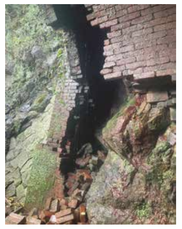
その場で立ち止まり、
溜まり、
光の落ちる空間を愛でる。

想い想いの時を過ごし、
再び振り返って先に続く動線へと
足を運ぶ。

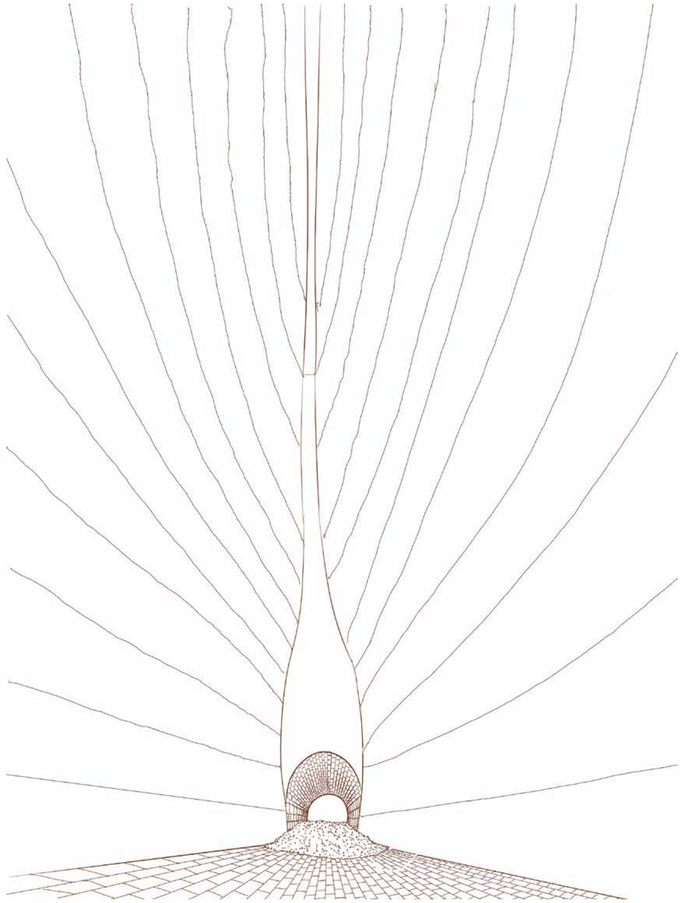
この自然の力に押されている隧道の姿を
振り返って見る場所。

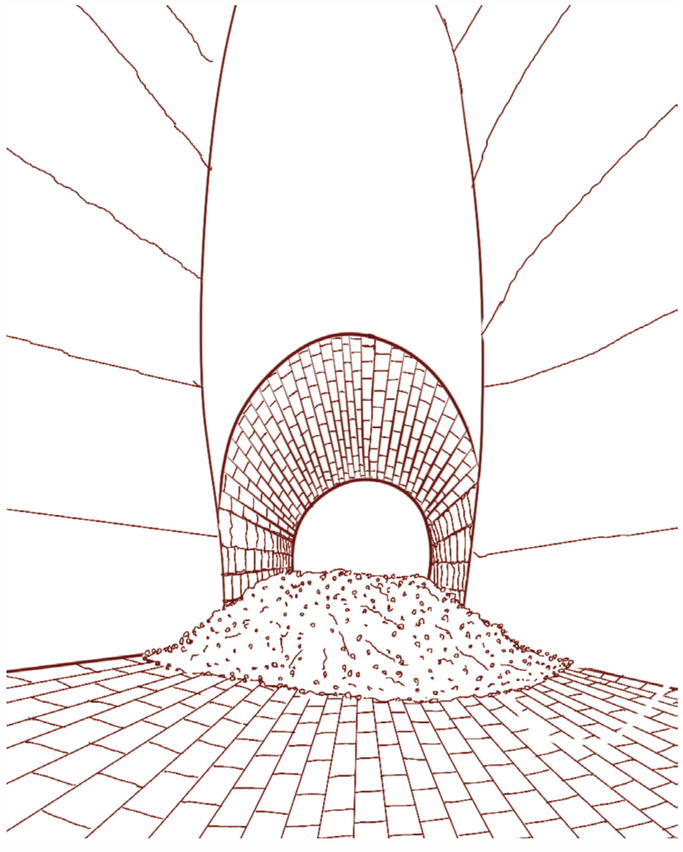


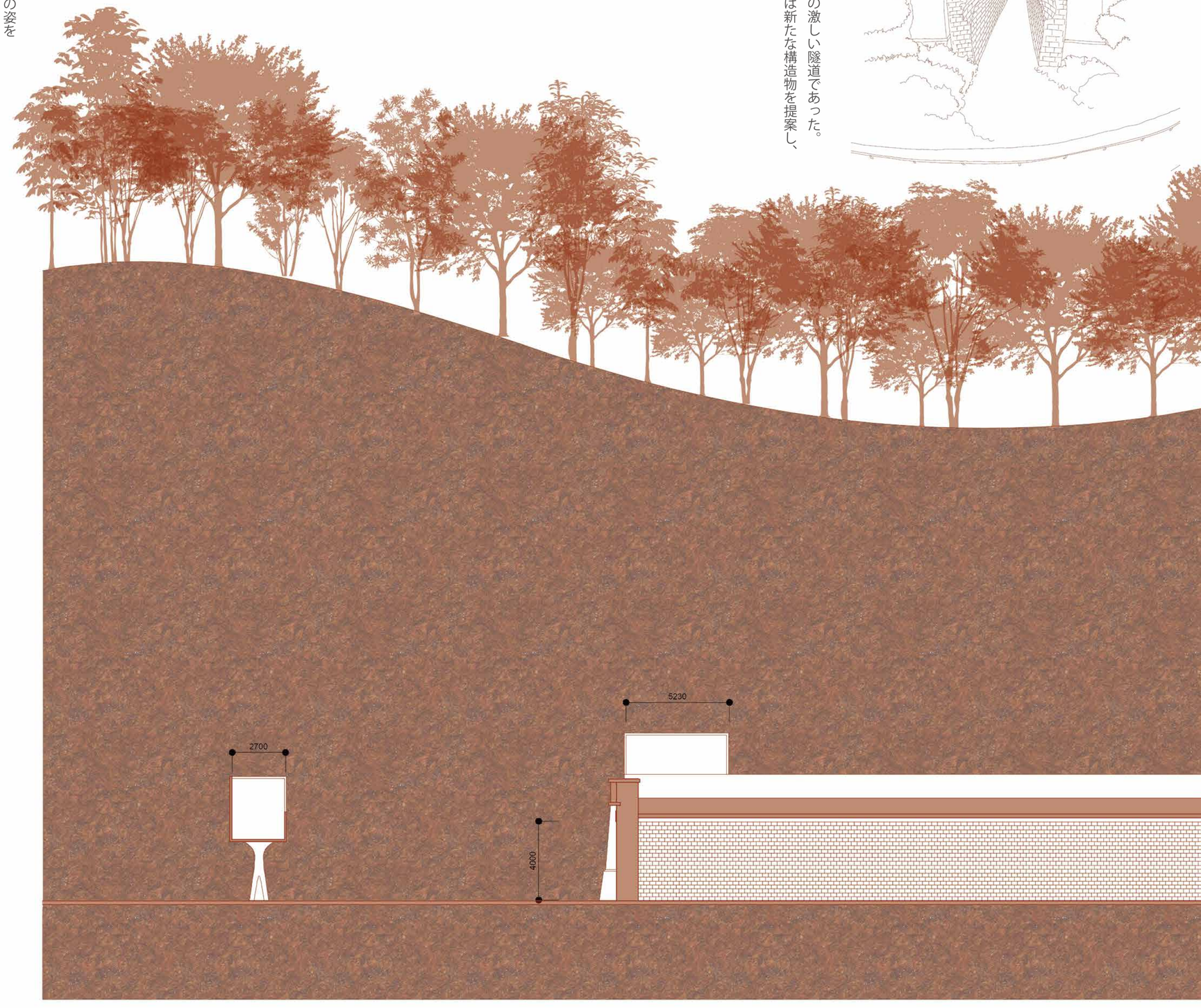




最も崩壊していた隧道で、出口付近は多種多様な瓦礫が積み重なっていた。



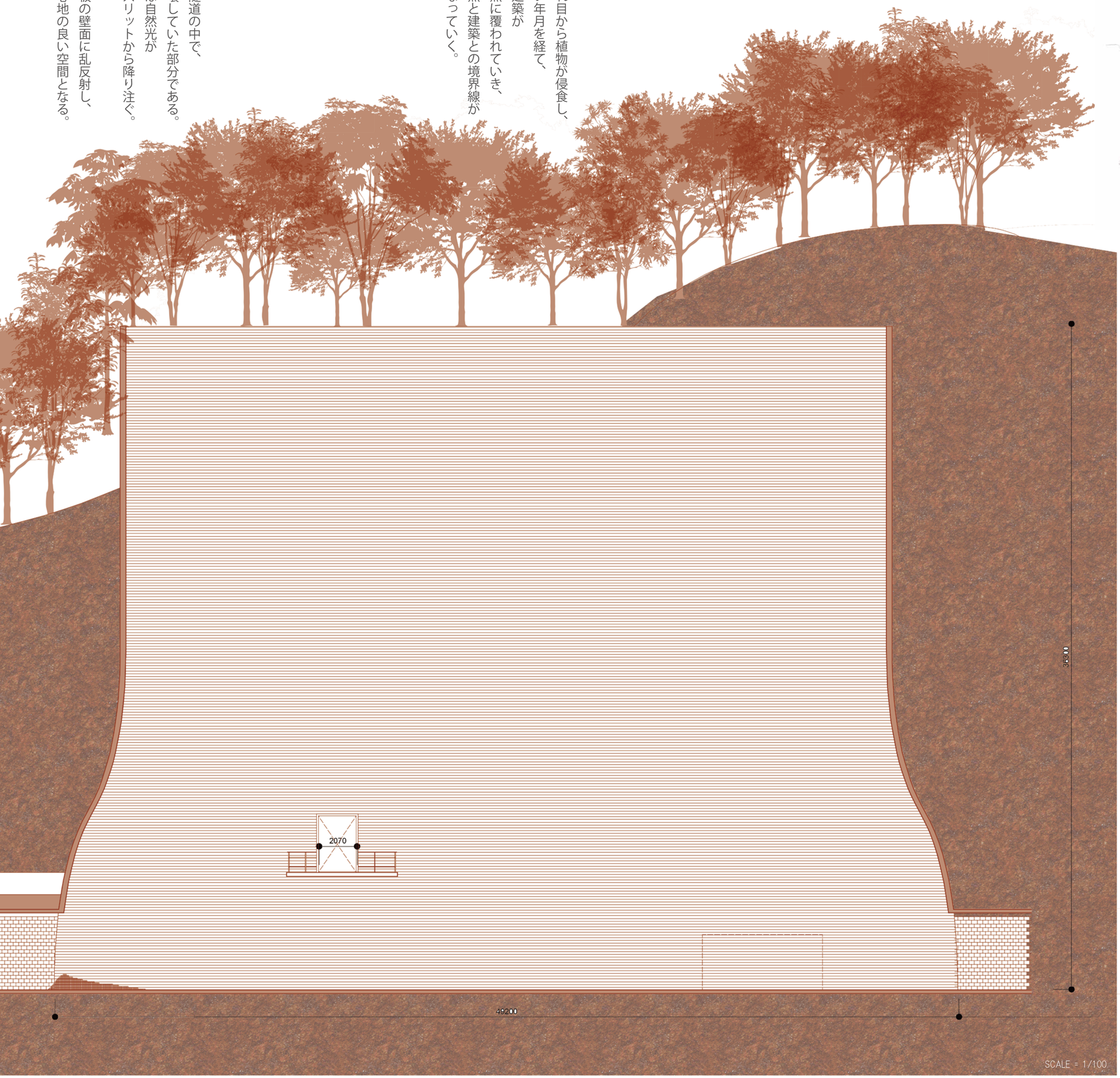




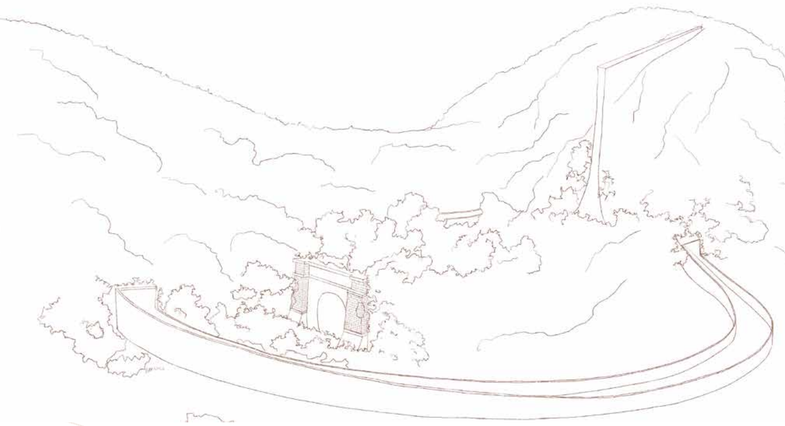
山の割れ目から植物が侵食し、
また長い年月を経て、
新たな建築が
再び自然に覆われていき、
より自然と建築との境界線が
曖昧になっていく。

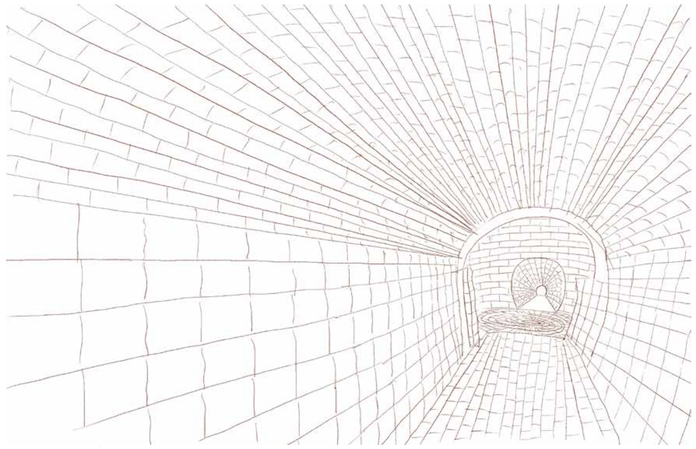
二つの隧道の中で、
一番崩壊していた部分である。
ここでは自然光が
細長いスリットから降り注ぐ。

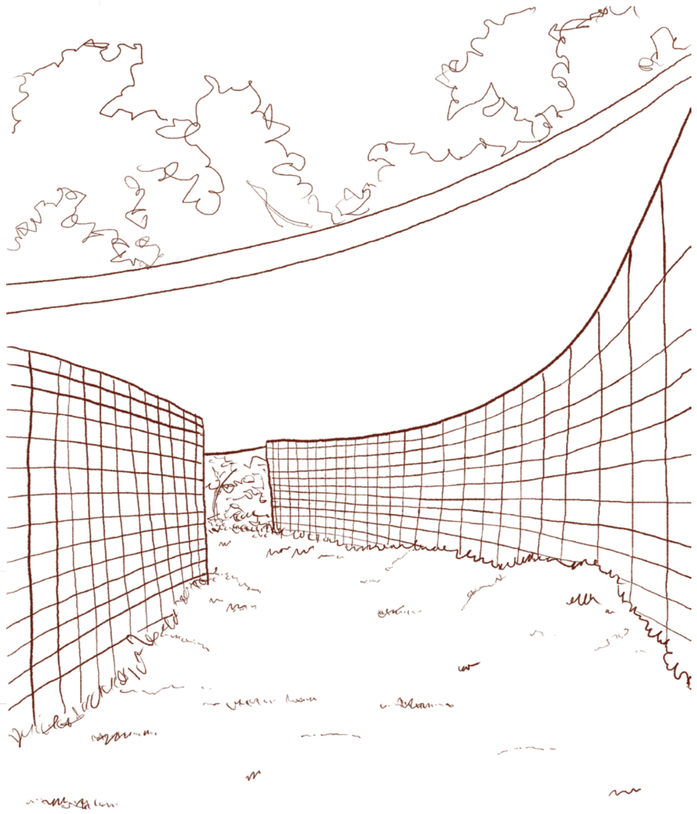
光が木板の壁面に乱反射し、
温かく心地の良い空間となる。

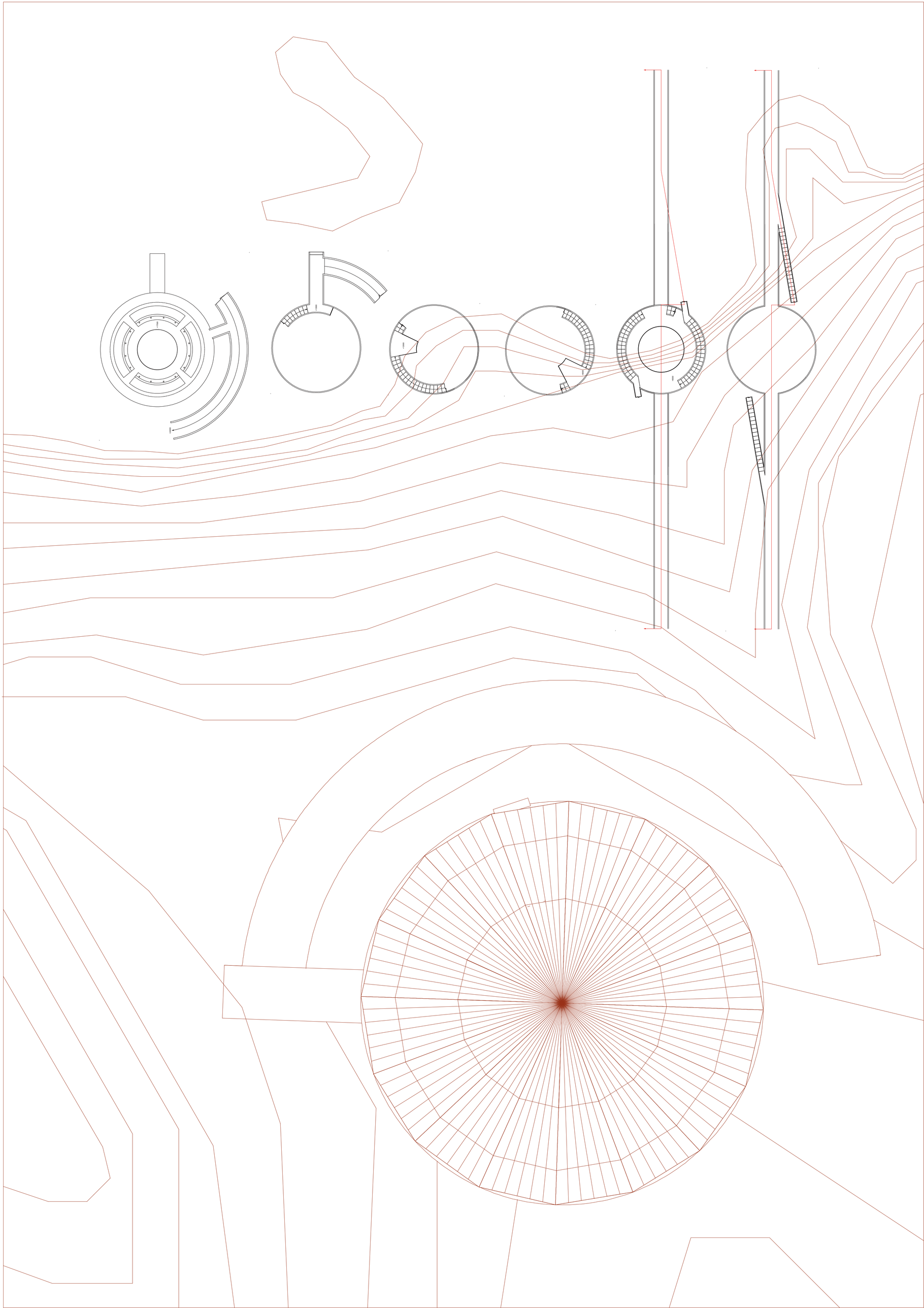


SCALE = 1/100







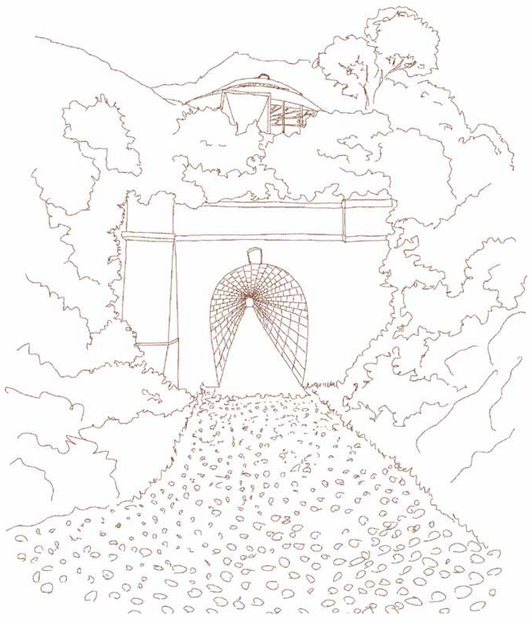


① 御手洗隧道　-prologue-

「袖摺隧道」、「御手洗隧道」、「稲荷山隧道」の3つの隧道は、紀勢中線全通に合わせた路線の付け替えの際に廃棄された。現在隧道は廃道となり、荒野に埋もれている状態となっている。記憶では残り続けているが、構造物として、忘れ去られつつある。

植物の侵食。

歩きながら動植物を観察する。
自然の雄大さと構造物の無力さを感じられる。
新宮鉄道の記憶を追体験しながら、構造物の儚さを動植物を通して伝える。



道となる範囲に直径10cmほどの石を並べ、人の動線をつくる。石は本敷地に落ちているもので、熊野古道との相互性もとれる。

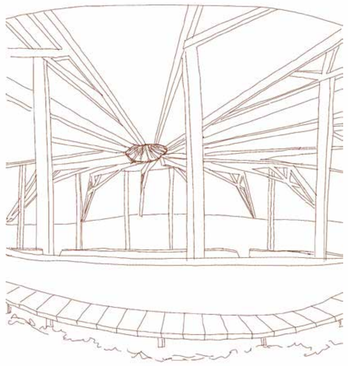


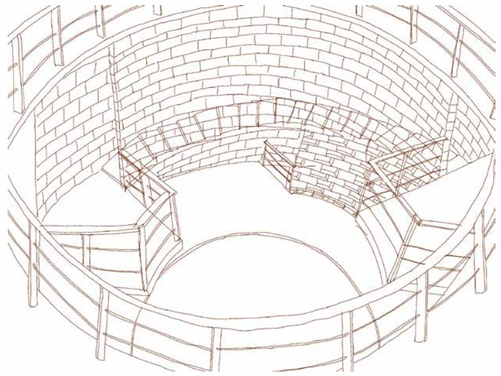


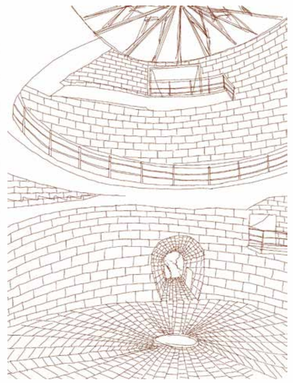
② 洞水門　-monologue-

静かな筒状の建築空間から水の音を聞き、
自然光に反射しきらきらと落ちてくる湧き水を愛でる。
新たな建築と隧道（人工的自然）と自然が一帯となる。

構造物（建築）はきわめて秩序だったものであり、人に馴染みのあるものである。
そこで、自然界に落ちているものにより秩序をつくることで、
人にとっての安心材料となり、
隧道の入り口に誘導する仕掛けとなる。







「建築」、「人工的自然（自然に還りつつある隧道）」、「自然」は境界線を見せず段階的に遷り変わり、
隧道に纏わりつくように建築を配置した。

その建築は敷地の風景とつながり、
いずれは人工的自然へと遷り変わる。

旧新宮鉄道の歴史背景や
自然との関わり方を、
時間軸のトンネルとして
感じることができる。

SCALE = 1/100

敷地　-Site-

・新宮を支えた熊野杉

和歌山県新宮市は熊野杉の産地で、林業を基幹産業として栄えてきた。昔から伐採した木材を筏に組んで流し、熊野川を下って河口の新宮港から帆船で大阪や東京に出荷していたが、新宮港は砂州で塞がるなど大型船が入港できず不便であった。そのため材木商らにより大型船の入港可能な勝浦港までの新宮鉄道が建設された。新宮勝浦間を通る路線には5本の隧道が存在している。そのうち当時の煉瓦土木建築の荘厳な姿が残ってはいるが、現在使われていない隣り合った2本の隧道、「御手洗隧道」と「稲荷山隧道」を対象とする。新宮鉄道は1934年（昭和9年）に国鉄に買収され現在は紀勢本線となっている。



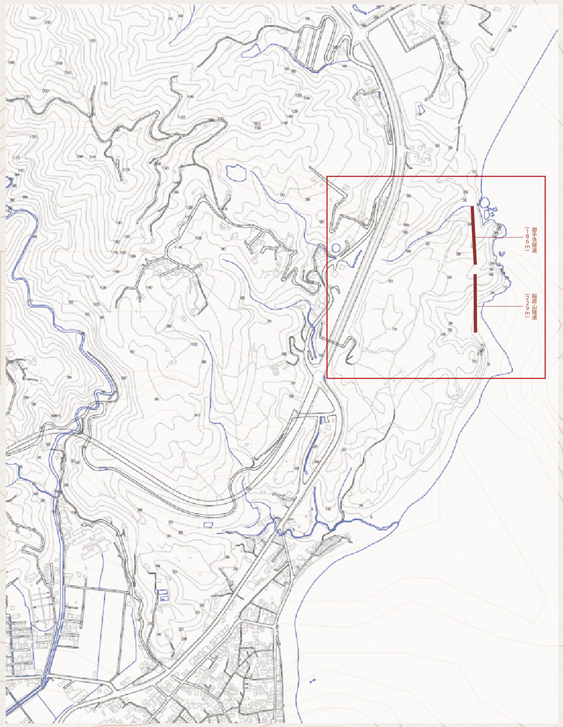


・平安鎌倉から続くお遍路ー熊野古道 中辺路

本敷地には熊野速玉大社、熊野本宮大社、熊野那智大社の熊野三山を詣でる熊野古道の中辺路にあたる高野坂があり、平安時代から鎌倉時代にかけて、上皇・貴族たちが熊野三山を目指した「熊野御幸」では公式参詣道として使用された。また古の人たちは道中で休憩したり、歌詠みを行ったりしたそうだ。

・愛され続け、記憶の中に残る新宮鉄道

2013年3月には、新宮市と那智勝浦町を結んだ旧新宮鉄道の開業100周年に合わせた記念行事も行われている。鉄道愛好家グループや観光団体、JR西日本などでつくる「熊野の鉄道100周年を祝い未来を考える実行委員会」があり、当時の記憶が未だに継承されているという重要な鉄道だったことがわかる。



自然と土木建築をつなぐプロムナード　-Design-

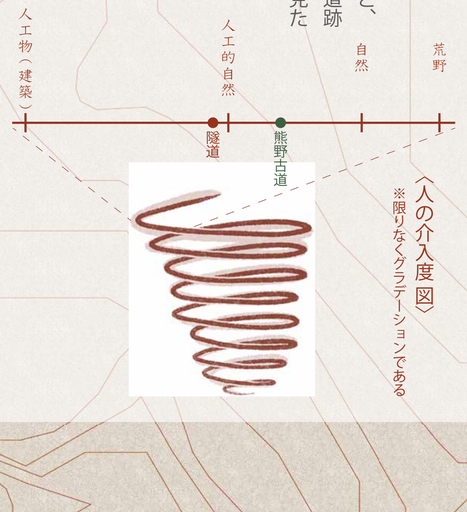
御手洗隧道（全長186m）と稲荷山隧道（全長229m）の中とその周辺を設計する。自然と人工物である新たに建築するもの（以下、建築）をつなげる役目として、主に隧道内部の赤れんがテクスチャは残す。

・古代 - 中世と近代 - 現代をつなぐ

古代・中世からある熊野古道が通るお遍路と、近代以降に文明発展してきた証でもある隧道跡をつなぐプロムナードである。　長い目で見たときの時間軸を本隧道周辺で感じ取れる。

・人工物（建築）と自然をつなぐ

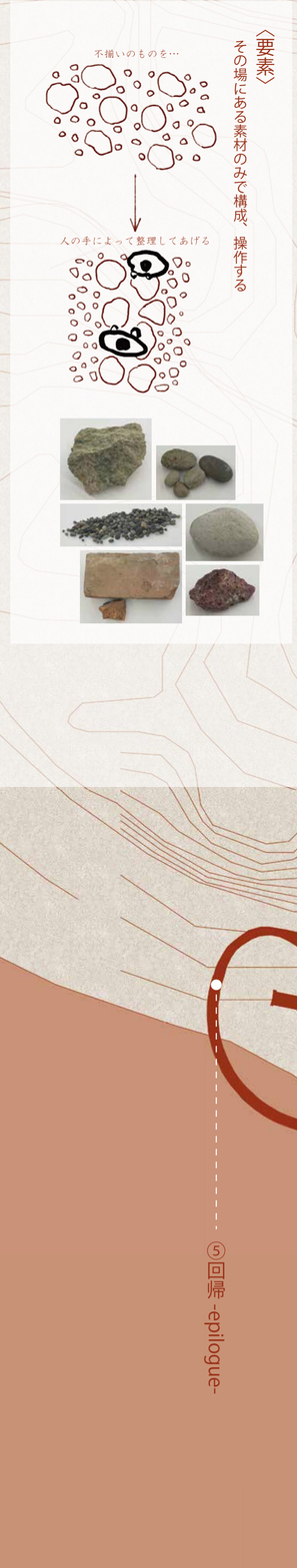
下図は人の介入度を図で表したものである。人の棲家である建築は人の手から離れると、次第に自然に覆われていく。そして人工的自然へと移り変わり、やがて自然と化す。自然を通り越した先には人が全く介さない域になり、荒野となる。自然はこの流れを拡大させながら循環し続けている。

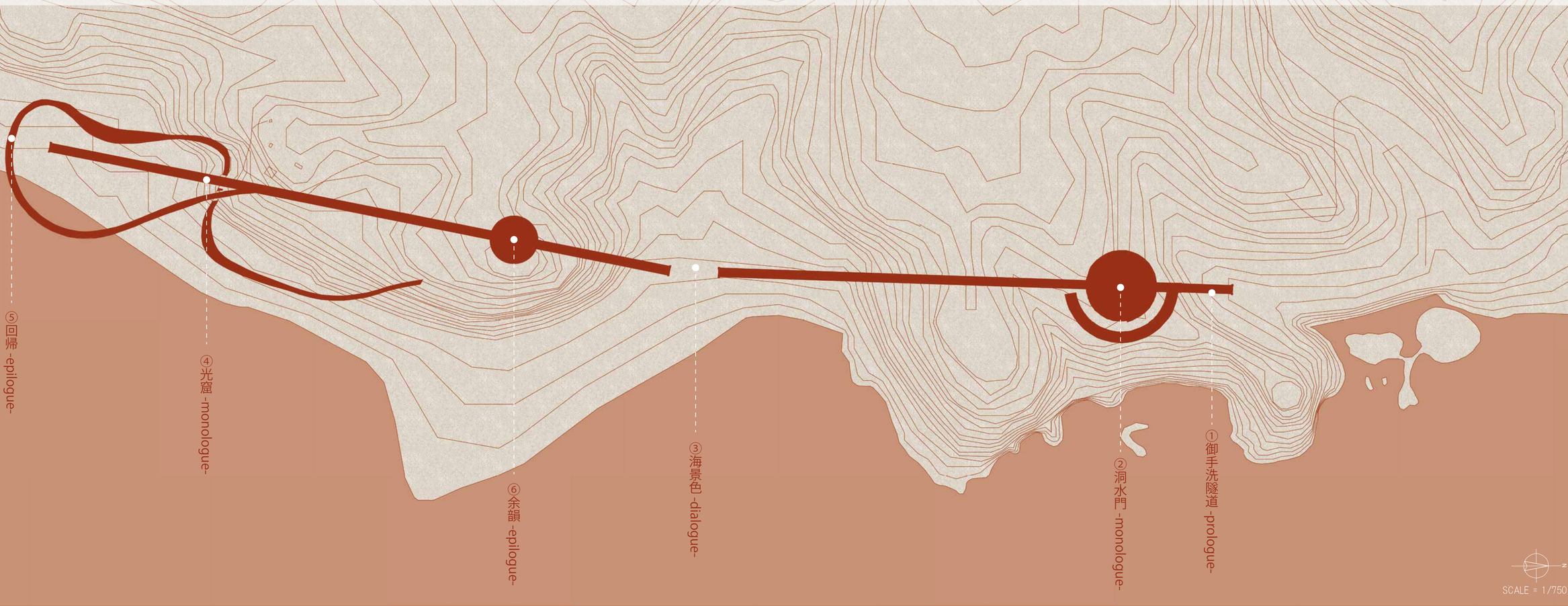


〈人の介入度図〉
※限りなくグラデーションである

・石のパターンと植物の相互関係

敷地には多種多様な石が落ちていた。それらを用い配置を変えながら道を作り、無秩序であったものに秩序を与え、その後自然がどう変化し、侵食していくかを経過観察する。





地の変遷を綴るプロムナード

人はこれまで建築をつくるために、大地を削ってきた。
日本はより豊かな生活を求めて、便利で快適な環境を目指し続け、建築を築いてきたが、
今では使用されていない遺跡や遺構が数多く存在している。日本が西洋技術から学び、
近代化を目指した明治からの土木建築は荘厳で、圧倒的な存在だった。
現代では到底つくることの出来ない財力を注ぎ込んだ誇るべき建築である。

地球が生まれ大地が形成され、人が技術を持ってして建築を創造する。
しかし時代の変遷と共に、そうした建築もいつしか役目が終わる。
いつの間にか構造物だけが残り、その僅かな建築の記憶が、
自生する生物により浸食されていき、生態系が循環していく。

ある時期から人は自らの技術に慢心し、生物をコントロールしようとしてきたのかもしれない。
人はいつしか、「人」と「人以外の生物」とを切り離して考えるようになったのではないだろうか。
この現状を見直し、自然と建築である人工物の関わり方について考える。